

青橋商店  
AOHASHI GO NOVELS

墮とされた  
エルフ王女

ミリス

成人向け  
ADULT ONLY

青橋由高  
安藤智也  
illustration

## Story

気が強く、プライドの高いエルフ王国の第二王女ミリス。母アイシャや姉マリナとは異なり少しばかりじゃじゃ馬な彼女には、秘密の恋人がいる。

「身分の違う下級貴族との関係が知られたらまずいではありませんか？」

美しき王妃を堕とした人間の魔術師ギユネイの次の獲物はミリスだった。

その歪んだ愛は母に続き娘に迫る。

「人間なんかに、こんな下等な生物に感じるわけがないわ！」

だが、その若い女体は望まぬ愉悅に蝕まれていく。

「助けてコザック……あたし、このままだとダメになっちゃうっ」

愛しい青年の名を叫ぶ少女だったが、その小振りの乳房の先端は硬く尖り……。

「アアッ、こんなの知らない……こんなのしてもらったことないのぉ！」

気丈な王女は、無事に恥辱の契約期間を終えることができるのだろうか。

「ミリス  
墮とされたエルフ王女」

安藤智也  
青橋由高  
(著)  
(イラスト)

# 目次

プロローグ

第一章

第二章

第三章

第四章

エピローグ

オリジナル版あとがき

電子版あとがき

177 172 165 118 85 24 8 5

## プロローグ

エルフ族の国に仕官する人間のギュネイは、馬車の心地よい振動に揺られながらもどろんでいた。

（ああ、またこの夢ですか。我ながら執念深いですね）

子供の頃から繰り返し見る同じ光景に、四十五歳の魔術師は夢の中で苦笑する。

（しかし、やはりアイシャ様はお美しい）

当時七歳か八歳だったギュネイの脳裏に深く刻まれた憧れのエルフの姿は、人間族とは根本的に異なる美しさがあった。

人間とエルフ、どちらも同じ創造主が担当したのだとしたら、ずいぶんな差別だと文句の一つも言いたくなるほどだ。

（この頃の私に、アイシャ様を自分のものにしたと教えたらどんな反応をするでしょうね）

国を出る前夜、すなわち一昨日の深夜、ベッドの上で艶めかしい痴態を晒し、夫への不義を泣きながら謝罪しつつも牝の悦びを極めた王妃の姿を思い出し、禿頭の中年男は股間のイチモツを滾らせた。

（おっと。うとうとしてたようですね）

その熱い疼きに導かれるようにうたた寝から現実世界に戻った直後、御者から声がかけられた。

「魔術師ギュネイ殿、目的地が見えてきましたよ」

「ああ、それはありがたいですね。そろそろお尻がどうにかなりそうでしたから」

「はははは、ご自慢の魔法のお薬でもどうにもなりませんか？」

「国に戻ったら早速レオン王に進言して、研究費用をいただかないといけませんね」

気さくなエルフの御者に冗談で返しながら、馬車の前方に目を凝らす。

そこには、純白の城の姿が小さく見えていた。

エルフ王国の西端に位置するこの城には現在、隣接する他国の監視及び友軍への補給という役割が与えられてはいるものの、軍事的観点から見れば、それほど重要ではない。

ギュネイがここに来た表向きの理由は視察だったが、実質的には休暇だ。先日大勝利に終わったリザードマン残党掃討作戦の褒美というわけである。

（レオン王、あなたのお気遣いには心から感謝いたしますよ）

徐々に大きくなる城を眺めながら、ギュネイは唇の片側だけを歪めて笑う。

（なにしろあなたの大切な奥方に続き、今度はあの愛らしい娘を奪う好機をいただけ

たのですからね)

「ギュネイは再び目を閉じる。

その瞼の裏には、初恋相手の娘の泣き喚く姿がはっきりと浮かんでいた。

## 第一章

エルフ王国の第二王女、ミリスはよく手入れをされた城の中庭で一人、花壇を眺めていた。

エルフの至宝と称される母アイシャとはタイプが違うものの、両親から整った顔立ちを受け継いだ少女の表情は、しかし、暗かった。

彼女の明るい髪と同じ色をした大輪の花たちを前にしても、ミリスの気分は晴れない。

「もう……どうしてこう、イヤなことって続くんだろ」

赤いリボンでくくった長い髪を神経質に指でいじりながら、澄んだ湖を思わせるブルーアイズで城を見上げる。

古いがしっかり清掃の行き届いた外壁は歴史を感じさせるが、まだ年若いミリスにしてみればただの退屈な建物ではない。

「父様はいつまであたしをここに置いておくつもりなのかしら。あたしだってもう大人なんだから、姉様みたいに外交のお仕事だってできるのにな」

少女の手のひらほどもある見事なピンク色の花をびん、と指で弾く。



「早くここから出て行きたいなあ」

エルフ族の象徴である長い耳を少し垂らし、うんざりしたように言う。

「そのような寂しいことは言わないで欲しいな、ミリス」

突然背後から聞こえてきた若い男の声に、ミリスはびくん、と剥き出しの肩を震わせた。この中庭にはミリスの他、ごくごく限られた者にしか立ち入る許可を与えていない。

「なんだ、コザックか。なに勝手に入って来てるのよ」

現れたのは金髪のエルフの青年だった。

「ああ、それは失礼。では、とっとと立ち去りましょうか」

「ま、待ちなさいよ、べ、別に出て行けとは言っていないでしょっ」

肩をすくめて身を翻した青年をミリスは慌てて制止する。

「いいわよ、あたしが許可してあげる。花が見たいなら好きなだけ見ていきなさい」

コザックはミリスの専属家庭教師だった。

軽くロールした金髪と青みがかかった瞳、そして柔和な笑みを浮かべたこの青年はまた、ミリスの秘密の恋人でもあった。

「せっかくだけど、それには及ばないよ」

甘いマスクをした歳上の恋人はごく自然な動きでミリスの顎を軽く持ち上げると、

「僕が見たいのはもっと可憐で美しい花だから」

ここに咲いているどの花の蜜よりも甘い言葉を囁き、王女の心を蕩かしてくる。

「なっなにを真顔でそんな恥ずかしいことをっ」

「恥ずかしい？ どこが？ 愛する女性の美しさを口にできないような男になんの価値があるのかな？」

端正な男の顔が徐々に迫ってくる。

「待って、誰かに見られたらあなたが」

「ここは限られた者しか立ち入れないと言ったのはあなただよ、ミリス」

「そ、そうだけど……んん」

これ以上の発言を封じるようにコザックの唇が重ねられた。

ミリスは形だけの抵抗で青年の胸を押し返そうとしたが、その手はすぐに恋人の首に回された。

可憐な花のような唇が緩み、甘い蜜で濡れた二枚の舌が互いの口内で絡み合う。

（バカ、こんなところ見られて困るのはあなたなのに）

コザックもそれなりの家柄の出自だが（でなければそう易々と王族の家庭教師になどなれない）、第二王女と釣り合う身分とは言い難い。

国王であるミリスの父レオンはフランクな性格をしているから頭ごなしに身分云々

を理由に交際をやめさせる、ということはないだろう。だがそれはあくまでもミスが正式に成人し、清い関係であったなら、という前提が必要だ。

「ミス、ああ、僕のプリンセス……！」

「ん……ダメ、キスだけだってば……ん……んんっ」

ねっとりとした情熱的な接吻の次は、指と手のひらとがミスの太腿をまさぐってきた。触れると撫でるの中間くらいの絶妙なタッチに、年若いエルフの唇から拒絶以外の反応がこぼれる。

「なにがダメなのかな？　大丈夫、ミスさえ声を出さなければ誰にも見つからないよ」

「ひうっ」

スカートの奥に侵入した青年の指先が、すっ、と少女の可憐なスリットを撫でた。下着の上からでも充分すぎるほどの衝撃がミスの背筋を駆け昇る。

（声を出さないのが無理なのよ、コザックのバカ……っ）

もちろん、そんなことはコザックも百も承知で、その端正な顔に少しばかり意地の悪そうな笑みを浮かべながら、焦らすようにミスの秘部を責めてくる。

「綺麗だ、ミス。あなたの笑顔も素敵だが、こうして羞じらう表情もたまらなく魅力的だ」

興奮してきたのだろう、肌に当たるコザックの息が熱い。いつの間にか芝生の上に押し倒され、服をはだけられていた。

「ヤダ、見ないで……!」

咄嗟に両手で露わになった胸元を隠すが、その隙に股に身体をねじ込まれてしまった。スカートの裾が大きく翻り、シンプルなデザインだが仕立てのよいショーツが陽光の下に晒される。

「どうして隠すのかな？ 僕たちはもう、何度も互いの愛を確認し合った仲なのに」

「それは……そうだけど。でも、こんなところでなんてしたことないわよっ」

「なら、今日が初めての記念すべき日になるね」

先端が赤くなったミリスの耳がコザックの口に含まれる。温かい舌がねちゃねちゃと卑猥な音を立てながら少女の鋭敏な部分を舐め回す。

「はうっ、それ、ダメ……耳は、耳は許して……んあぁんっ!」

自分でも驚くくらい大きな声が出てしまった。慌てて口を塞ぐが、そのせいで隠していたバストのなだらかな隆起が現れる。

恋人はその一瞬の隙を見逃さず、少女の成長途上の膨らみを両手で揉み始めた。

優しく、慈しむように若乳を撫で回す一方で、ときおり手のひらを使って頂の蕾を転がしてくる。

「んっ……んん……んはああ……！」

ぞくぞくするものが背筋を伝って全身へと拡散していく。右手の甲で口元を覆い、左手で己に覆い被さる恋人の金髪を切なげに撫で回す。

両脚は勝手に左右に開き、股にねじ込まれた青年の腰をきゅっと挟み込んでいる。  
(もう、最近のコザック、ちょっとがつつきすぎっ)

コザックと恋仲になってから肉体関係を結ぶまで、そう時間はかからなかった。

コザックと出会うまでは恋も、キスも、それどころか異性と手を繋ぐことすら知らなかったミリスは今、急速に女として花開きつつあった。

(ただどあたし、これくらい強引なのがいいと思っちゃってる、かも)

そんな無垢な少女だったミリスに対し、コザックは恋愛経験は豊富のようだった。

初めて結ばれた夜、思い切って過去について問い質したミリスに、

「ミリスより長く生きてるからね。片手では収まらない数の女性と恋に落ちたよ」

コザックはそう答えた。

「けれど、今ならわかるんだ。僕のこれまでの人生は、こうしてあなたと出会うためにあったのだと」

初恋も知らなかったミリスにとって、このハンサムで物腰のスマートな青年はまさに理想の存在だった。身分の差というハンデすら、恋心を煽る燃料となった。

「もう潤んできたね。だんだん反応がよくなってきたようで、僕も嬉しいよ」

「やっ、バカぁ……なんでいつも、そういうこと言うのよ……!」

ショーツの中に潜った指で湿った狭穴をまさぐっていたコザックが笑う。

「恥ずかしがるミリスが可愛いからだよ。よく覚えておいて。男はね、好きな女性の羞じらう顔はもちろん、泣き顔ですら見たいと思う罪深い生き物なんだって」

そう言うコザックはより深く指を蜜洞に埋めると同時に、ミリスの愛らしく尖った乳首を口に含んだ。つえばむような唇による愛撫に、美少女エルフは芝生の上で大きく仰け反る。

「ンンンン……!!」

乳房の先端突起はさらに膨張し、女の泉は新たな蜜をこぼして恋人の指を濡らす。

「挿れますよ、ミリス。痛かったら言ってください」

王女の純潔を奪った肉銛が膣穴にあてがわれた。

（あっ、あっ、太い……コザックの、凄……っ）

ミリスは慌てて両手で口を塞いで己の声を殺した。

痛みによるものではなく、歓喜による声を堪えるためだった。

「くう……ミリス、ミリス……!」

感極まった表情の恋人がゆっくりと顔を寄せてくる。

（コザック、ああ、素敵よコザックう！）

ミリスは口元を覆っていた手をずらすと、愛しい男の唇が重なるのを待つ。

恋人との秘密の逢瀬を秘匿してくれる色とりどりの花の中、ミリスは心と身体の両方とで幸せの波にさらわれていく。

「コザック、好き、好きよ……あああ、あっ、ああ……っ」

掠れながらもだんだん甲高くなっていく少女の声を聞いていたのは恋人と、中庭の上空を優雅に飛翔する一羽の黒い鳥だけだった。

エルフ王国王レオンの後継者候補は現在、実の娘である二人の王女だ。

だが、長女と次女とではその立ち位置は大きく違う。

ミリスの姉であり第一王女であるマリナはすでに父の側近として、主に外交特使として関係各国を飛び回る忙しい日々を送っていた。

母アイシャによく似た清楚な王女は国民からの支持も高く、誰もが彼女がレオン王の跡継ぎだと考えている。

（あたしだって別に、姉様を蹴落としてまで、なんて考えてはいないけど）

中庭での逢瀬を終えたミリスは心地よい疲労と下腹部に残る甘い疼きを覚えつつ、

執務室で大量の書類と向かい合っていた。

（でも、いくらなんだってこの差は納得いかないわよっ）

片や第一王女として、国の代表となつてあちこちを周遊する姉マリナ。

片や第二王女という理由で、勉強・修業の名目で何年もこの城で勉強漬けの日々を過ごす自分。

年に数回だけ、両親や姉とともに他国に出向くこともあるが、それは完全におまけ扱いだ。

（いいなあ、姉様。あたしだって姉様みたいな綺麗なドレスを着て、あちこちの国に行つて、パーティーとかに出てみたいのに）

椅子から立ち上がり、部屋の隅にある鏡の前に己の姿を映してみる。

キモノと呼ばれる異国の服、もしくはシャーマンの衣装を彷彿とさせる袖なしの上着と短いスカートにロンググローブとオーバーニーソックスの組み合わせは、ミリス自身によるコーディネートだ。

（まあ、これはこれであたしに似合つてるとは思うんだけどね）

動きやすいし、なにより、このような服を着ているエルフは他にはいないだろうというオリジナルティが気に入っている。

（あたしって、たいていの服は着こなしちゃうし）



姿見の前でくるり、とターンをしてみせる。短いスカートがふわりと舞い上がって白い下着が露わになるが、部屋には誰もいないので気にしない。

「これでもうちちょっと、姉様みたいにおっぱい育ってくればなー」

両手で胸に軽く触れてみる。少女の手のひらでも簡単にすっぽりと覆えてしまう程度の表面積しかないのが寂しい。

「母様と姉様があの大きなんだから、あたしだってきつと……！」

せめてブラジャーが必須となるくらいのサイズまで育って欲しいというのが、ミリスの切実な願いだった。現状、なくてもあまり困らないのが悲しい。

（コザックも、胸が豊かな女の子のほうが好きだろうし）

コザックはなにも言わないし、いつもこの慎ましやかな膨らみを丁寧にあ愛してくれる。けれど、本心では違うかもしれない。

（もしもあたしより大人っぽい女が現れたら、コザックだってそっちに心惹かれちゃうかも、だし）

恋をしたからこそ生じる不安に、勝ち気そうな顔が曇る。

（コザックがあたしから離れられなくなるよう、エッチのときも頑張らないと）

エルフ族の男はそもそも人間などの他種族に比べて性欲が薄い。性交時における勃起の具合もあまり芳しくない。

だからこそエルフの女は閨でのテクニクを磨く、という伝統があり、特に前戯が重要視される。勃ちが悪いペニスを硬くさせ、挿入できるところまでエレクトさせる必要があるためだ。

(パイズリってやつがあたしにもできたらよかったのに。母様とか姉様くらい大きかったら簡単にできるのかなあ)

再び胸の膨らみに手を重ねてみる。簡単に手で覆えてしまえる悲しい事実、長い耳がしゅん、と垂れる。

(メイドたちは、女の乳は男に揉まれると大きくなるって言ってたのに。あたしだってもうだいぶコザックに揉んでもらったのに。なんで全然膨らまないのよっ)

姿見の前で口を尖らせながら乳房を揉む。

「ん……ふっ……ふう……んあ……あは……っ」

先程の愛の交歓の余韻が残っていたのか、胸乳の頂点からむず痒いような快感が広がる。立ったまま腰がゆらゆらと揺れ、甘く切ない吐息が漏れる。

(ん……ヤダ、あたし、こんなエッチな顔するんだ。コザックにいつも、こんな顔、見られちゃってるんだ……)

姿見に映る己の女の貌の艶めかしさに、乳房をまさぐる動きが加速する。一度は落ち着いたはずの肉欲の火が再び点り、少女の子宮が熱を帯びる。

（ダメだよ、こんな顔見せたら。コザックに嫌われちゃう。エッチな女の子だって思われちゃうのにい）

そう思いつつもミリスの手はバストから股間へと移動してしまう。スカートの中に潜り、ショーツの上からツンと尖った小さな豆を指先で転がし始める。

「あっは……！」

鏡の中でもう一人の自分が大きく震えるのが見えた。

（あ、あたし、酷い格好してる。王女なのに、こんなところで、立ったままアソコを、女の子のクリクリをいじくってるよお）

扉に鍵はかけてあるから誰かが入って来る心配はないし、部屋の防音もしっかりしている。しかし、王女としての仕事場で浅ましく自慰行為に耽るという背徳的なシチュエーションこそが最高の刺激だった。

「ン、ン、ンふっ、ンふンン……！」

右手で陰核をまさぐり、左手の人差し指を嚙んで嬌声を堪える。

膝がかくかくと揺れるので、咄嗟に脚を開いて堪える。がに股になりながらも指を動かして、硬くなってきた肉真珠への刺激を続ける。

（く、来る、来てる、びくびくってのがまた、また……あ！）

ほんの少し前に恋人から与えられたのと同じ、いやそれ以上の快感が少女の華奢な

身体を包み込む。

「つく……ひつく……う……ッ」

ぎりぎりと指に歯を立てながら、ミリスはこの二度目のアクメに到達する。

鏡の中に映る自分の姿を淫らだと恥じる一方で、艶めかしく美しいとも思った。

オナニー後特有の気怠さと自己嫌悪を感じつつ公務に戻ったミリスの元に来客があった。

「ミリス様、ギュネイ殿が到着されました」

長年仕えてくれている老執事が連れて来たのは、エルフ王国の軍師である人間族の中年男だった。

「お久しぶりでございます、ミリス様」

恭しく頭を下げるギュネイは長身のエルフ族から見るととても背が低く見える。成長期のミリスもそう背は高くないが、それでももうギュネイは追い越しているだろう。剃っているのか一本の毛髪もない見事な禿頭と鋭い眼光、漆黒のローブと相まって、見る者にどこか不吉なものを感じさせる魔術師だ。

「久しぶり？ 五年くらい前にも会ってるでしょ。……ああ、人間にしてみたら長い

かもね」

言外に、人間族の寿命の短さを揶揄する。

「はい、我ら人間にとっての五年は決して短くはありません。私もこのとおり、一層老けてしまいました」

しかしギュネイは少女の幼稚なからかいなどまったく意に介さず、穏やかな笑みで切り返してきた。

「それに対してミリス様はさらに魅力的になりました。さすがレオン様、アイシャ様の血を引いておられますな」

「ふん、見え透いたお世辞なんていらないわよ。人間なんかに褒められたって嬉しくないしねっ」

「ミリス様、軍師殿に対して失礼ですぞ」

執事がたしなめてくるが、ミリスは無視をする。

「ああ、かまいませんよ。高貴な種族であるエルフにしてみれば、私のような人間族の存在が面白くないのは理解できます」

ギュネイの余裕ある態度にミリスは鼻の頭に皺を寄せ、わかりやすい不機嫌の表情を浮かべる。

（こいつ、ホンットに生意気！ 人間のくせに！ ちょっと父様に信頼されてるから

って！)

ミリスが公務を抜け出して中庭の花壇にいたのは、今日、ギユネイがこの城に到着すると聞いていたためだ。

「で、優秀な人間の軍師様がこんな辺鄙な城になんの用よ」

「先日お送りした文書のとおり、軍事に関する施設の視察でございます。ご承知のとおり我が国は現在、一部の敵対モンスターの殲滅作戦を行っておりますので、そのための確認とお考えください」

「『我が国』？ あたしの聞き間違いかしらね？」

「ミリス様っ」

あまりに露骨な、そして稚拙なイヤミに執事が本気の顔で叱責してきたが、ギユネイは眉一つ動かさない。

「失礼しました。エルフ王国は現在、複数の軍事作戦を展開しております。その際、この城は軍の後方支援の役目が与えられます。色々と不愉快なこともあるでしょうが、エルフ族のためになにとぞご協力を」

執事を手で軽く制止しつつ、深々と禿頭を下げられては、さしものミリスもこれ以上の嫌がらせはできなかった。

「わ、わかったわよ！ 好きにすればいいでしょ！」

ふん、と顔を横に背けながら言い放つミリスに、老執事がさらに表情を陰しくする。  
「ありがとうございます、ミリス様」

このあと始まるであろう老執事の説教に脅えていたミリスは、だからギユネイが口元に浮かべた笑みを見逃してしまう。

もしここでこの魔術師の邪悪な笑みを見ていれば、あるいはもっとギユネイを警戒したかもしれない。もしかしたら己を襲う運命を回避できたかもしれない。

だが、ミリスは気づけなかった。

そして、彼女の人生の歯車はゆっくりと狂い始める。

## 第二章

エルフ王国はその資源豊かな国土の恩恵もあり、周辺の国々が羨むほどに富んでいる。

現在でも自軍の先頭に立つ勇猛な武人、英雄王レオン。

レオンの妃であり、人妻・母親となった今でもエルフの妖精と讃えられる美しき王妃アイシャ。

そんな国民的英雄である二人のあいだに生まれたのがミリスと、その姉マリナだ。（あたし、いつになったら姉様みたいになれるのかしら）

日課である午前中の勉強（コザックを含め、数名のミリス専任家庭教師がこの城には住んでいる）を終え、名目上は客人であるギュネイとの苦痛でしかない会食をどうにかやり過ごしてもなお、午後は王女としての公務が待ち構えている。

「ねー、もっと別のお仕事ないの？　姉様みたいにあたしも他国の視察とかしたいわ」

次々と書類を運んでくる老執事に愚痴をぶつけても、

「マリナ様も今のミリス様と同じようなお仕事をこなしておりますよ」



毎度変わらぬ小言が返ってくるばかりだ。

「嘘ばかり。姉様があたしの歳の頃にはもう父様に同行してたじゃない」

「マリナ様は長女ですからな。そこは諦めてくだされ」

「ずるいなー。あたしと姉様、ほとんど歳も変わらないのにー」

エルフにとっては五歳や十歳程度の歳の差はないに等しい。

もっとも、思春期までは他の種族の何倍、何十倍も成長の度合いが異なる、というわけではない。人間族で言うところの二十歳前後くらいから成長あるいは老化の速度がぐくと落ちる。

だから、ミリスの目の前にいるこの執事のように年老いるには、相当な年月が必要なのだ。

「大丈夫ですよ、そろそろミリス様にもそういった公務が任されます」

「根拠は？」

「長く生きていますと、そういった勘も働くようになるのです。ミリス様もいずれわかるようになりますよ」

「ただ先の話よ。いくらエルフでも気が遠くなるわ」

はっ、と笑い飛ばし、持っていたペンを放り投げる。今日の仕事はもうやりたくないという、子供のような露骨なポーズだ。

「お仕事を放棄してはなりません、ミリス様」

しかし執事はわがままな王女の細い指に再びペンを握らせる。穏やかな笑みを崩さないのが逆に有無を言わせぬ迫力を感じさせ、ミリスは観念する。

「わかったわよ、やればいいんでしょ、やれば！」

「それとミリス様」

「……まだなにかあんの？」

執事が小言モードに入っただのを察知し、ミリスは身構える。

「先程のギユネイ殿との会食、あれはいけませんな」

「どこがよ。ちゃんとホストとして対応したつもりだけど？」

「今日だけではありません。ギユネイ殿が来てからもう何日も経ちますが、一度としてホストの役目を果たしておりません」

「なんであたしが人間ごときの機嫌とらなきゃならないのよっ」

はあ、と執事がゆるゆると頭を振りながらわかりやすく嘆く。

「そのようなことでは、とてもではありませんが我が国の代表として外交の場には送り出せませんぞ？」

先程とは真逆の発言をしてくる。

「外交のときはちゃんとやるわよ」

「普段できないことを本番でできると？」

「う」

「いいですか、外交相手はそのほとんどが他種族の方々なのですよ。中には無礼な者もいるでしょうし、わざとミリス様を不愉快にさせてくる相手もいるかもしれません」

「わ、わかってるってば」

「でしたら、ギュネイ殿にもそれ相応の態度をおとりください。あの方はミリス様のお嫌いな人間族ですが、我が国の大切な頭脳なのもまた事実なのですぞ？」

「……」

正論をぶつけられて愉快な者などいない。それがミリスのように甘やかされて育った少女ならばなおさらだ。

この老執事はそれもすべて承知した上で説教してくるのだから、ミリスとしたら面白くない。

「お前、あたしのことが嫌いなわけ？」

「いいえ。大切に思っているからその苦言でございます」

悔しいことに、このセリフも真実だとわかってしまう。

「……いいわ。今日の夕食にもあの人間を呼びなさい。あたしの本気、見せてあげる

から」

かしこまりました、と深々と腰を折り曲げる執事の口元に満足げな笑みが浮かんだのを見てしまい、ミリスは当てつけのように大きな音を立てながら書類にペンを走らせるのだった。

今後の軍事作戦に備えての施設の視察、という名目でここにやって来たギュネイだったが、一番の目的はアイシャの下娘、ミリスの様子を確認することだった。

（最後に会ったのは五年前でしたが、あまり変わっていませんね、あのお転婆は。そこがミリス様の魅力なのですけれど）

軍師のためにあてがわれた立派な部屋で一人、視察の報告書をしたためていたギュネイはそのニヒルな顔を楽しげに歪ませる。

（姉のマリナ様ほどアイシャ様の面影はありませんが、それでもやはりあの方を彷彿とさせてくれます）

幼い頃に見た美しすぎるエルフに一目惚れをした少年の成れの果てである中年魔術師は、長い年月ですっかりその愛情を歪ませてしまった。

（もしかしたらアイシャ様も昔はあのように活発な頃もあったのかもしれないし

ね)

人妻であるアイシャを卑劣な手段でもって手籠めにしたギュネイの次なる獲物は、初恋相手の二人の娘だった。

幸い、今のギュネイには彼女たちの父であり国王であるレオンからの絶大な信頼と、それに付随する高い地位がある。

プライドの高いエルフ族たちの中には人間族であるギュネイを露骨に嫌う者も少なくないが、そんなものを気にするような時期はもうとくに過ぎ去っている。

むしろ、そういった連中を能力や実績といった目に見える結果で黙らせるという面白い喜びすら覚え始めているくらいだ。

(そういう意味でも、ミリス様の攻略は楽しみでなりません)

報告書の作成を終えた黒衣の魔術師はペンを置き、唇の片側だけを持ち上げて笑う。ギュネイの人生における最大の目的であったアイシャの籠絡は終わった。だからこの後、たとえ二人の娘を墮とせなくとも悔いはない。

万が一、ここまでの卑劣な行いが白日の下に晒されて処刑されたとしても、ギュネイは己の人生に満足して笑いながら死んでいける自信があった。

そしてそういったある種の達観は心の余裕にも繋がり、焦りから生じるミスを防ぐ役割も果たしてくれる。ギュネイにとってはすべての歯車がいい方向に回り始めてい

るのだ。ミリスの運命の齒車とは対照的に。

（幸い、あの娘の弱みもいくつか見つかりましたしね）

ギユネイは当初、この五年ほど会っていなかったミリスの様子を窺えばそれでいいと考えていた。城の設備の視察が必要なのは事実だったし、すでにアイシャを手の内に収めた今、焦る理由はなかったからだ。

だがギユネイにとって幸いなことに、ミリスにとっては不幸なことに、なかなか興味深い事実が判明した。この情報が正しいとわかれば、ギユネイはすぐにでも新たな行動を開始するつもりでいる。

（あとはミリス様がどう反応するか次第、です）

思わず漏れ出てしまいそうな笑い声を堪えていると、控えめにドアがノックされた。「ギユネイ殿、お食事の支度が整いました」

獲物のほうから罠に飛び込んで来てくれた僥倖に、禿頭の魔術師の口元が緩みっぱなしになる。

「なにか楽しいことでもございましたか？」

「ええ、おかげさまで。どうやら退屈しない視察になりそうです」

呼びに来てくれた老執事に答えながら、ギユネイはしかつめらしい顔をつくるのに苦勞するのだった。

もう一人の親のような執事に諭されたエルフの王女はせめてもの反撃と、わざわざドレスに着替えて食堂に現れた。髪もきっちり整え、宝石も身に着けての完全な正装だった。

もっとも、他国との外交時に着用する王族のドレスなどと比べると一段劣るのも事実だ。それを纏うことが許されるようになっていたい、というのが目下のミリスの最大の願いでもあった。

「素敵です、ミリス様」

髪をセットしてくれたメイドの言葉によって得た自信は、ミリスを見たギュネイの反応と言葉によってさらに深まる。

「これは……驚きました。お母様かと一瞬目を疑いましたよ。やはり、美しく高貴な方は一種独特な雰囲気と共通してお持ちなのですね」

目を見開く魔術師の表情や声はとても世辞には思えない。ギュネイのこうした素の反応を初めて目撃したミリスの機嫌が急速に上昇する。

（ふふん、下等な人間族でもあたしの美しさはわかるみたいじゃない）

給仕として控えている執事に自分の接待スキルを見せつけるのが目的なので、優雅な表情を崩さぬよう、胸の内だけで笑う。

「あら、優秀な軍師様は外交もお得意なのね。そうやっていつも交渉の場で母様を引

き合いに出してるのかしら？」

「まさか。私はこのとおり見た目も中身も無骨で粗野な人間の魔術師風情です。残念ながら、そういった気の利いた交渉は苦手です」

そう言いながらも慣れた動作で席に着く。その落ち着いた様子や態度は、こういったかしこまった場での経験が豊富なのだと感じさせる。

「度の過ぎた謙遜は失礼に当たるとあたしはその口うるさい執事に教わったけど？」

「ミス様、ご勘弁を」

執事は苦笑いをするが、ミリスのギュネイへの応対に安堵しているようでもあった。「はは、素晴らしい先生をお持ちのようですね、ミス様は。これならレオン王やアイシャ様にいいご報告ができそうです」

「父様と母様に？ なにかあたしについて頼まれてたの？」

目の前に垂らされた餌に、ミリスは早速食いついてしまう。

「お二人にとってミス様は大切な娘ですからね。色々頼まれてはおります」

だがギュネイはわざと思わせぶりな言葉ではぐらかす。

（あたしがちゃんとやってるか調べさせてるのかしら。もしかしたらギュネイの報告次第で、あたしも姉様みたいなお仕事させてもらえるかも……！）



こういったことを根掘り葉掘り聞き出したかったが、執事の間にもあり、ミリスはぐっと堪える。

（そうよ、焦ったらダメ。あたしだって大人の会話ができるってところ、こいつに見せつけてやらないとね。父様や母様にいい報告してもらわないと！）

姉のマリナのように一人前と認められれば、恋人のコザックとの交際も許可してもらえるかもしれない、という計算も働く。

（こいつって父様の腹心なのよね。軍の実質的な責任者だって聞くし、この人間、結構な利用価値あるんじゃない……）

これまでミリスは、ギュネイを同族でないというだけで興味の埒外に弾き出していたが、冷静に考えてみれば、この禿頭の男は相当な権力を持っているのだ。

（たとえ卑しい種族であろうとも、そういった連中を使いこなしてこそ王族よね）  
相手の実力を先入観だけで見下す愚かさには気づけないのは、ミリスの若さと経験の浅さ、そして第二王女という高すぎる地位によるものだ。

その短慮さはこれからの人生で少しずつ修正していけばいいのだが、経験値とするには目の前の魔術師はあまりにも相手が悪すぎた。ただの一度の失策がそのまま取り返しのつかない致命傷に繋がる、そんな存在がギュネイなのだ。

「ねえギュネイ、あたし、あなたのことをまだよく知らないわ。よければ色々な話を

聞かせてくれない？」

ミリスが白ワインの入ったグラスを傾けながら言うと、

「私のような者の話でよろしければいくらでも」

ギュネイは目を細め、口元を歪めて答えた。どうやらこれがこの男の笑顔らしい。

（こういう輩も配下にしてこそ王族よね）

驕った思考をする世間知らずの王女をよそに、ギュネイはその節くれ立った指を器用に使って肉を切って口に運んでいく。

レアステーキを噛み切る一瞬、その目が肉食獣のような光を放った。

（この姫様はわかりやすく助かりますね）

他種族の中で長年生きてきたギュネイは、相手の態度が真逆に変わるといふ体験を幾度もしてきた。己より強い者にへつらうのはエルフだろうが人間だろうが、どの種族でも一緒だ。生物の本能なのかもしれない。

若い頃は腹も立ったりしたが、人生も中盤に差しかかるとそういった無駄な感情は引っ込み、これをどうやって利用するか、という打算に意識のリソースが費やされる。（どうやらミリス様はここでの生活にすっかり退屈しておいでのようなのだ）

元々活発で社交的な性格だったミスにとって、この辺鄙な場所での禁欲的な日々は相当つらいらしい。

（だから、あんな男に大切な純潔を差し出したりするんです。まったく、もったいない。嘆かわしいことです）

ここに来てまだ数日しか経過していないが、すでにギュネイはミスと家庭教師の不適切な関係を察知していた。信頼できる問者、情報通はこの国のあちこちに在りし、使い魔も駆使すれば、たいていのことは調べられるのだ。

（証拠も揃いました。その気になればもういつでもあの家庭教師の男を処罰することも可能です……）

しかし、ギュネイは焦らない。

幸い、軍師としてのギュネイは現在、そう多忙ではない。先日 of 軍事作戦で当面の脅威を完全に排除したため、よほどのことがない限りはしばらくは平穏と見ていた。

この視察はギュネイの骨休みという側面もあるのだ。

万が一、その「よほどのこと」が発生した場合は報せが届くだろうから諦めて王都に戻ればいい。チャンスは今回の一度きりではない。

（なにしろ私の手中にはアイシャ様があるのですからね）

手札にはジョーカー、すなわちアイシャがいるというのがギュネイの最大の武器だ

った。

「ところでミリス様、語学のお勉強についてはいかがです？」

食事が終わり、ゆっくりと互いにグラスを傾けながらの会話の際、ギュネイはそう切り出した。

「これから先、マリナ様のように諸外国を回ることになれば、色々な言葉を話す機会も増えるでしょう。基本的には通訳がつかますが、多少なりとも理解できると役立つはずです」

ただ単に勉強しているかと尋ねるよりも、この少女が夢見ている外交の仕事を匂わせるようにすればスムーズに会話が進むだろうという計算だった。

「え、ええ、そうね、ちゃんとやってるわよ」

ミリスの青い瞳がわずかに揺れる。その理由が家庭教師の青年にあると知った上で、ギュネイは気づかなかったふりをする。

ミリスの成績が良好なのは本国に定期的に届く成績表でわかっているから、わざわざ聞く必要はないのだ。

つまり、ミリスが今狼狽えたのは、語学を担当する家庭教師のコザックの存在が原因であるとわかる。

「そうですか。ええと、語学を担当している彼……そう、コザックと言いましたか」

白々しく恋敵の話題を振る。

「何度か話をしましたが、頭も切れるし、優秀な青年のようですね。エルフ族には難しい人間族の発音も綺麗でしたし、あれなら通訳としても活躍できそうです」

これまたわざとらしく王女の前に餌を垂らす。

「通訳？」

「ええ。実は今、通訳を兼ねた秘書というか助手を個人的に探しているのです。なにぶんにも非才なもので、仕事を一人では処理しきれないのです。恥ずかしいお話ですが」

謙遜しつつ、ミリスの反応を観察する。

「コザックをアンタの……あなたの秘書に？」

「もちろん今すぐというわけではありませんがね。彼にはミリス様の家庭教師という大切な仕事を最優先にしてもらわないとなりませんから」

「そ、そうよね、もちろんだわ」

「しかし、問題もあります。彼は貴族の出身だと聞きました」

「そののなにが問題なの？」

「エルフの、それも高貴な家の方が、私のような卑しい人間の秘書を引き受けるか、ということですよ」

わざとらしく肩をすくめ、これまた露骨に餌をぶら下げて獲物が食いつくのを待つ。

「よろしければミリス様から彼にそれとなく聞いていただだけませんか？」

「わかったわ。でも、あまり期待しないでちょうだいね」

言葉とは裏腹に、ミリスはすっかりその気になっているようだった。

ミリスはその夜のうちにコザックの部屋をこっそり訪ね、ギュネイの話を伝えた。

「ギュネイ殿が本当にそんなことを!？」

「ええ、あの人間、すっかりあなたを気に入ったようだったわ」

コザックはミリスから伝え聞くと、これまで見たことがないほどに興奮した様子を見せた。白い頬を紅潮させ、落ち着きなく部屋をうろうろと歩き回る。

「……そんなに嬉しいの？」

「それはもちろん！ 僕のような下級貴族にとって、軍師殿直属の秘書だなんて夢のような話だもの！」

「なによ、だったらその……あ、あたしとその……け、け、けっ、結婚、すれば、もっと凄いいことになるじゃないのよっ」

コザックとはまた別の理由で頬を真っ赤にしながらミリスが言う。

「ああ、ミリス、僕だって可能ならば今すぐにでもそうしたいところだよ！ でも、僕とあなたではあまりに身分が違う」

だから、とコザックは続けた。

だからまずは王都に入り、少しでもミリスに釣り合う地位を獲得する必要があるのだと。

ギュネイの秘書としてその才覚を認められればいずれチャンスは訪れる、とコザックは熱心に繰り返した。

「まあ、そうよね。あの男はしょせん人間なもの。放っておけば勝手に寿命で死んじゃうしね。……ねえ、コザックはそれまで待てる？」

「待つ？ ギュネイ殿が亡くなるのを？」

「あなたがあたしに釣り合う身分になるまで、それまであたしを愛し続けてくれる？」

ミリスはさらに赤くなった顔を恋人の胸に埋める。長い耳が溶けそうなほどに熱い。「それは僕の言葉だよ、ミリス。……愛してる。この世界の誰よりも。僕だけの女神、ミリス」

顎を持ち上げられ、唇を奪われる。

静かに侵入してくる舌を迎え入れながら、ミリスは愛しい恋人にその若々しい肢体

を委ねた。

翌日、ミリスは早速ギュネイにコザックの意志を伝えた。

自分たちの未来に不安を感じていたミリスにとってギュネイの申し出はまさに一縷の希望だった。

まさかその希望の糸が己を釣るための罟であるとも気づかずに。

「そうですか。では、こちらもそのつもりで心積もりをしておきましょう」  
ギュネイの反応は、ミリスの願望込みだとしても前向きに思えた。

（なんだ、この人間、使えるヤツじゃないの。さすが父様が選んだ軍師ね）  
この一件を境に、ミリスのギュネイを見る目が変わったのは間違いない。

まだまだ人間への偏見は捨てられないし、ギュネイ個人への警戒心も色濃いままだ  
ったが、それでも最初の頃のような、露骨な態度は取らないようにした。万が一、自  
分の言動のせいでコザックの出世が流れたらと考えると、とてもそんなことはできな  
かったのだ。

「ミリス様、ちょっと大切なお話があるのですが、少しよろしいでしょうか」  
ギュネイがただでさえ陰鬱そうな顔をさらにしかめながらミリスの元にやって来た



のは、それから三日経った夕食後のことだった。

「今でないと、ダメなの？」

このあとはコザックと会うことになっていたミリスはそう答えたが、

「はい。できるだけ早いうちにご相談できれば、と」

ギュネイは引き下がらなかった。

この腰の低い人間の魔術師がここまで粘るのは予想外で、だからミリスは不安になった。それだけ喫緊の用件だと考えられたからだ。

「実は、彼のことなのです」

迷っているミリスの尖った耳元でギュネイの低い声がそう告げる。

「コザックが、どうかしたの!？」

「お静かに。彼には内密にしておきたい話なのです」

「……………わかったわ」

コザックの名を出されては、ミリスに他の選択肢などなかった。

「私の部屋でよろしいでしょうか」

「……………そうね」

自分の部屋に恋人以外の男を招き入れるのは生理的にいやだったし、コザックの話ならば絶対に誰にも聞かれたくない。自室だと、執事やメイドがやって来る可能性も

ある。

（人間の部屋になんて入りたくないけど、しかたないわよね）

今、この城内で最も安全なのは客人であるギュネイの部屋であるのは間違いないとミリスも思ったからこそその承諾だった。

しかしミリスは一つ、大きな見落としをしていた。

これから彼女が訪れようとしているのは母国の有力者の部屋であると同時に、一人の男の部屋でもあることを。

「少しばかり不愉快な話になるかもしれませんが」

部屋に入り、薄暗い部屋の真ん中でテーブルを挟んで向かい合うと、ギュネイはいきなり不安になるような言葉で切り出してきた。ランプの炎のせいでギュネイの顔が不気味に照らされているのも少女を心細くさせる。

「な、なによ、もったいぶらないで」

「彼の身元を部下に調べさせておりました」

ギュネイはこちらを見ないまま、二人分のグラスをテーブルに置く。

「酒と水、どちらになさいますか？」

水、と答えようとする前にギュネイは自分の前のグラスに血のように赤い液体を瓶から注ぐ。この状況で水と答えるのはなにかに負ける気がしたので、

「あたしにも同じのを」

と、まるで挑みかかるように黒衣の魔術師に空のグラスを差し出した。

男の部屋で飲酒をする、という行動が軽率なのはわかっていたが、ギユネイが水同然にグラスを呷るのを見て、ミリスもワインを一気に喉に流す。

（あ。でもこれ、美味しい）

酒の味を知るのも高貴な者の教養です、と執事から言われ、毎晩の食事に各地のアルコールを嗜んできたミリスでも驚くほどの味だった。

「コザックの家が下級貴族だから、秘書にはできない、と？」

「まさか。それを言ったら私のような他種族の魔術師風情はどうなるのです？」

減ったミリスのグラスにワインを注ぎ足しながらギユネイが首を横に振る。

「彼が平民だろうとなんだだろうと私には関係ありません。優秀である、ただその一点のみが大事なのです。私にとっては」

私にとっては、というところを強調する。

「つまり……アンタ以外の誰かにとってギユネイの出自が問題ってわけなのね？」

再びグラスに口をつけ、魅惑の味を舌の上で転がす。こんな状況だというのに、もっと飲みたくなるような美味だった。

「お察しのとおりでございます」

「誰よ、コザックの身分に文句あるのは」

「誰、と個人名は出せません」

「庇うつもり？」

「いいえ、そうではありません。彼の身分に難色を示すだろう方々があまりに多すぎるためです」

「……よくわからないわ」

この人間がなにを言いたいのか理解できない。ただ、なにか大きな不安がじわじわと胸に広がっていく。

「一国の王女である方とお付き合いするには彼の身分はあまりにも低すぎる、ということですが、ミリス様」

ギュネイのこの一言に、ミリスが持っていたグラスを落とさなかったのはまさに奇蹟だった。ぶるぶると震える指でどうにかグラスをテーブルに置くのを見て、ギュネイは内心驚く。

（さすがは王女、子供ではあってもそれなりに肝は据わっているわけですね）

だが、ギュネイにとってはそのほうが好都合だ。狩りは獲物がしぶといほど愉しめる時間が長くなる。

「ど、どういう意味、かしら」

指以上にミリスの声が震えていた。

「まずミリス様にお伝えしたいのは、私はこのことを誰にも告げる気はない、という事実です」

我ながら白々しいな、と内心苦笑しつつ、猫撫で声を出す。

「……」

「しかし、お二人の関係が周囲に知れ渡るのは、残念ながら時間の問題であるのもまた事実と言わざるを得ません」

そして、ぬけぬけと大嘘を吐く。

ギュネイの調べた限り、ミリスとあの青年、コザックとの関係を知る者はいないはずだからだ。恐らくは相当に慎重に、周りの目を気にしながら付き合ってきたのだろう。

あるいは、身近な者の何人かは薄々感づいてるのかもしれないが（たとえばあの老執事や、住み込みのメイドたちなどはその可能性がある）、彼ら・彼女らが己の主の醜聞をわざわざ言いふらすとは考えにくい。

つまり、ミリスとコザックの身分違いの恋が露呈する確率は極めて低い、というのが真実だ。悪意ある魔術師が暗躍しなければ。

「……………あたしはどうすればいいの？」

「その前にミリス様がどうされたいのかをお聞かせください。対応策はそれからです」

グラスにまたワインを注ぎ足すと、ミリスはそれを一気に飲み干した。飲まないとやっていられないのかもしれない。

（そんなに一気に飲んだら身体に毒ですよ？　まあ、それに混ぜてあるのは毒ではなく、もっと素敵なものですけどね）

ギユネイは薬を含ませたワインは袖からローブの中に仕込んだ革袋に流したただけで、自分では一滴も口にしていない。飲むふりをするのを見破られないためにわざと部屋を薄暗くしておいたのだ。

「彼と別れる、というのでしたら、私が後始末をいたします。レオン様やアイシャ様のお耳に届くようなことは絶対にございません」

別れる、という単語を聞いた瞬間、ミリスの剥き出しの肩が大きく跳ねるのが見えた。予想どおり、思惑どおりの反応にギユネイの口元が少しだけ緩む。

「あ、あたしは……」

「彼と別れたくない、というのでしたら、条件付きではございますが、尽力させていただきます」

「えっ？」

ギュネイのこの申し出がよほど意外だったのか、ミスが目を見開いた。普段の勝ち気そうな印象が薄れ、少女らしいあどけなさが感じられる。

（ああ、そういう表情をされると、アイシャ様の面影が濃くなりますね）

初恋相手の、憧れの存在であるアイシャの血を分けた娘であることを改めて感じ、ギュネイの中に歪んだ喜びが広がる。

「そんなこと、できるの？」

「ミス様と彼の関係を知っている者たちの記憶を封印する、という魔法がござい  
ます」

目の前に垂れてきた希望の糸に少女の表情が明るくなるが、ギュネイは抑揚のない声で続ける。

「しかしこれは極めて高度な魔法で、私にしてみてもかなりリスクの高いものとなります。具体的には、寿命を縮めるのです」

「寿命……」

さすがにショッキングだったのだろう、ミスが息を呑む。が、

「どれくらい縮むの？」

すぐにそんなことを尋ねてくる時点で、この王女の本心がわかる。

（見下している人間の寿命よりも、自分たちの関係のほうが大切なのですね。その正

直な欲望は嫌いではありませんよ。そのほうがこちらにも良心の呵責に悩まないで済みますからね。私に良心などという要素がまだ残っているならば、ですが」

ギュネイはなにも言わずに立ち上がり、ゆっくりと、焦らすように部屋の中を歩く。「一人の記憶を封じるのに約半年、といったところでしょいか」

「半年……」

ミリスの顔には「たった半年」という色がありありと浮かんていた。

エルフの若者にとって半年など、人間にとっての数日にも満たない時間なのだろう。「私が調べた範囲ですと、お二人の関係を知っているのは片手で収まります。すなわち、最大で二年半の寿命ということですね」

「……」

さすがの王女も面と向かって二年半の寿命をよこせ、とは口にしない。が、その青い瞳は雄弁に彼女の本心を物語っている。

「私はすでに人生の折り返し地点を過ぎています。恐らくは最大でもあと三十年生きられるかどうか、というところでしょう」

「たった三十年……」

「つまり、残りの人生の一割、というわけです」

「アンタは……なにが望みなのか？ あたしになにを要求したいのか？」



ミリスはようやくギュネイが交渉をしてるのだと気づいたようだった。同時に、最悪のケースも予感しているのか、不安そうに己の剥き出しの肩を抱いている。

「そうですね……」

ギュネイは己の姦計が成功しつつあることに小さく頷きながら、この哀れな獲物の脅える姿を網膜に焼き付けるように見つめる。否、そのまなざしはもうすでに視姦と言っていいほどに欲望が滲み出ていた。

「ミリス様にこのようなことを告白するのは恥を晒すようでつらいのですが……実は私、ずっとアイシャ様に懸想しておりまして」

「か、母様を!？」

「ああ、ご安心を。不埒なことなど考えておりません。私はただ、あの方の神々しいまでにお美しい姿を拝顔するだけで幸せなのです」

その憧れの女性を卑劣極まる手段で手籠めにした事実などなかったようにうそぶく。

「当たり前よ、自分の身分を考えなさい、この卑しい人間風情が!……あ」

今の自分が置かれた状況を思い出したのだろう、ギュネイを罵ってすぐ、ミリスは気まずそうに目を逸らした。

「気になさらないでください。ええ、私はとても卑しい人間です。なにしろ今、ミリス様の弱みにつけ込んで、初恋相手の娘で己の歪んだ欲望を発散しようと画策してい

るような男なのですからね」

ギユネイはそう言っていると、そっとミリスの肩に手を置いた。

昨日までのミリスであれば即座にギユネイの手を払い除けただろう。

だが今夜のミリスはそうはせず、ゆっくりと身体を振って不快の意を示すだけだった。

（目の前に垂らされた希望の糸を己の手で切ることなど、誰にもできないのですよ、ミリス様）

（あたしが……あたしがこのサイテーの男に身体を許せば、コザックと別れないで済むの？）

ミリスがまだコザックと肉体的な関係を結んでいなかったら、あるいは迷うことなくギユネイの悪辣な提案を蹴っていたかもしれない。いや、間違いなくそうしていただろう。大切な純潔を人間の中年男に許すなど、想像するだけでおぞましい。

けれど、ミリスの初めてはすでに愛する青年に捧げ終わっている。ミリスはもう、なにも知らない娘ではないのだ。

また、記憶封じの魔法を使わせればこの卑しい魔術師の死が結果的に近づく、とい

う考え方もできる。

もしもギユネイの寿命が残り僅かであれば途中で勝手に死んでくれる、という希望的観測もなくはない。

（でも……でもこんなクズに身体を預けるなんて、考えただけで吐き気がするわよ）

ちらり、と黒ローブの中年男を見る。

人間族としても低い、ずんぐりむっくりとした体型。

一本の毛髪も生えてない頭部。

見ているだけで暗い気分になる陰鬱な表情。

そのくせぎらぎらと輝いている鋭い目。

全身から漂ってくる禍々しい雰囲気、そのすべてが愛する恋人とはあまりに正反對だった。

なにより王女にとって許しがたいのが、この魔術師が人間族である、という点だ。

気高く美しく、種として上位と信じているエルフの自分が、下等な人間の牡に凌辱されるなどということは到底許容しがたい。

（だけど、あたしが断ればこいつはきっと）

すでにギユネイはミリスの最大の弱みを握っている。

「念のために言い添えておきますが、レオン様やアイシャ様、マリナ様に訴える、などという行為は慎まれたほうがよろしいかと思えます」

「わかってるわよ。あたしだってそこまでバカじゃないわ」

自分のスキャンダルが及ぼす悪影響は容易に想像できる。

己の色恋沙汰のせいで国を混乱させるのは王女として絶対にやってはならない行為だ。ミリスにも王女としての自覚がある。

「……………」

それでもまだ決断できないミリスに、ギユネイが勝ち誇った顔で続けてくる。

「下手に誓約書などを残せばそれが逆に醜聞の証拠となりますから口約束となりますが、魔術師にとって言葉は言霊です。口にした約束はどのような証文や契約書よりも強固な楔となります」

「……」

「また、先程恥を忍んで申しましたように、私はあなたの母上であるアイシャ様に分不相応にも懸想しております」

「それが……なによ」

「すなわち、あの方の娘であり、あの方の面影があり、あの方同様にお美しいあなた様にも心を奪われている、ということですよ」

「……気持ち悪い」

吐き捨てるように言ってやったが、母親であるアイシャと同等と称されたのは嬉しかった。

エルフ族の至宝、などと言われる美貌の母は自慢だったが、常に比較される娘からすると必ずしもいいことばかりでもなかった。

母とよく似ている姉・マリナの存在があったこともミリスに影響している。

(母様に似ているって言われたこと、あんまりなかったな、あたし……)

恋人であるコザックからは聞いているだけで逃げ出したくなるような賞賛を数え切れないほどもらったが、母と比較された記憶はない。

コザックなりに気を遣ってくれたのだろうが、コンプレックスの原因である母をダイレクトに引き合いに出されるのは、不思議と悪い気分ではなかった。

無論、恋人以外の男に身体を許すなどという行為への嫌悪感がそれで薄れるはずもなく、ミリスの肌には先程からずっと鳥肌が立ったままだ。

「期限は、私がここでの視察を終えるまでとします。まあ、最長でも残り二十日、恐らくは半月といったところでしよう」

そんなミリスをよそに、ギュネイは淡々とした口調で取引条件を告げてくる。

「その間、ミリス様のお身体を自由にさせていただく代わりに、私はあなた方の関係

を知る者たちの記憶を魔法で消去します」

まるで城の設備の補修について語ってるかのような事務的な様子が逆におぞましい。  
「私は女性の肉体的苦悶に性的な興奮を覚える嗜好は持ち合わせておりませんので、その点におきましては乱暴はいたしません」

「アンタみたいなのに指一本でも触られるのはあたしには充分すぎるほどの苦痛なんだけど？」

言い返す声にいつもほどの力がないのが悔しかったが、それでもミリスは精一杯の虚勢を張る。せめてもの意地だった。

「それは精神的な苦痛の範疇かと存じます。私の、そう多くない残りの寿命と、これから先、あなたがたを待つであろう長く、幸せな人生を比較して決断してもらえれば幸いです」

言葉遣いはあくまでも慇懃さを保ったままだが、自分を見つめるねっとりとした視線に、ミリスはこの男の本性を感じた。

（でも……でもあたしには選択の余地はない……）

今、ギュネイが口にした言葉を頭の中で反芻する。

（そうよ。あたしとコザックにはまだ何十年、何百年もの未来が待ってるのよ。それに比べたら、この薄汚い人間が帰るまでのたかが半月やそこら、瞬きするあいだから

いのものじゃないの)

ミリスにはもはや他の選択肢はない。

できるのは、この苦渋の決断に対する覚悟を決めることのみだった。

(ごめんなさい、コザック。でも許して。これはあたしたちの将来のためなの)

本当なら今頃はあの優しい恋人の胸に抱かれていたはずなのに、と思うと泣きそうになったが、ギュネイに弱みを見せたくない一心で涙を堪える。

「……いいわ、その条件で。ただし約束を守らなかったら、あたしはどんな手を使ってもアンタを殺すわよ。たとえ相打ちになろうとも」

「煮るなり焼くなり切り刻むなり、お好きなようにしてくださいってかまいません」  
ギュネイは深々と腰を折り、哀れな王女に一礼をした。

「それでは早速ですが」

そして、少女にとって最初の悪夢が幕を開けた。

(大丈夫よ、目を瞑っているあいだにすべて終わるわ。これはただの夢……そうよ、  
たまに見る怖い、でも起きたら内容を忘れている、あれと一緒によ)

だからきっとすぐに忘れられる、と懸命に頭の中で繰り返しているのは、これから

始まる辱めへの恐怖の裏返しだ。

ギュネイはまず、ミリスに目隠しと手枷をつけ、視界と腕の自由を奪った上でベッドに四つん這いにさせた。

この時点でプライドの高い王女には凄まじい屈辱だったが、いきなり服を脱げと言われるよりはまだましだと言い聞かせる。そういった展開も覚悟していたのだ。

「そう脅えなくとも結構です。言いましたとおり、私にとってアイシャ様は女神のような存在です。そしてあの方の娘であり、あの方のように美しいミリス様も私にとっては大切な女神なのです」

「ひっ」

すぐ耳元でギュネイの粘っこい声が聞こえ、ミリスは身体を震わせた。視界が覆われているせいで聴覚が敏感になっている。

「ですから、いきなりこの瑞々しいお身体を蹴る、などという無粋な真似はいたしません」

「ふ、ふん、でも結局はあたしの身体が目的なんですよ？　いくら取り繕っても一緒に、この下衆！」

「はい、そのとおり、私は最低の下衆です」

罵られたというのに、ギュネイの声はどこか嬉しそうなのが恐ろしかった。



「彼とは、どのようにして深い仲になったのです？」

「な、なんでアンタなんかと言わなきゃならあうっ」

エルフ族の誇りである長い耳の先が撫でられた。

本来なら悪寒しか感じないはずの相手から甘い波が与えられたことに、ミリスは困惑する。

「興味があるのですよ。もちろん、恋人との大切な記憶は自分たちだけのものにしておきたいというのでしたらかまいません」

言いながらギュネイの指がミリスの耳やうなじ、肩を這い回ってくる。

話さないのならこのまま凌辱行為を始めるぞ、という脅しだった。

「言うわよ、言えばいいんでしょ、この変態ッ」

この場に老執事がいれば間違いなくたしなめられたであろう汚い言葉で人間の魔術師を罵倒してから、コザックとの馴れ初めを語り始める。

「最初は、ただの軽薄そうな男だと思ったわ」

家庭教師として紹介されたコザックを初めて見たときは、顔はいいが、なにを考えているのかわかりにくい、というのが第一印象だった。

その若さにもかかわらず第二王女の家庭教師を任されるだけあって確かに頭はよかったし、教え方も巧みだった。

「でも、慣れてくると彼の優しさがわかってきたの」

ふん、と小さく鼻息を吐く音が聞こえたが、ギュネイは黙ったまま聞いている。相変わず肌を撫でてはくるが、胸や股間といった際どいところには触れてこないのがミリスにはありがたかった。

「コザックはああいう見た目だから誤解されやすいのよ」

「なるほど、確かに女性には苦勞しなさそうな整った顔立ちですね、彼は。羨ましい限りです」

「アンタは顔じゃなくてその腐った性根を先になんとかするべきね」

「ははは、これは手厳しい」

ミリスは嫌っている男に撫でられているという事実から目を背けるために、少し早口で話し続けた。

ただの家庭教師だったコザックを一人の男性として意識し始めた瞬間。

コザックが自分を単なる生徒としてしか見ていないのかという悩み。

二人のあいだに横たわる身分という大きな溝。

（だけど、だからこそあたしはコザックを信じられた。コザックもあたしを信じてくれた。好きになってくれた。愛してくれた）

これまでコザックと二人で築いてきた愛の日々を思い出しながらミリスは話す。

互いを意識し、意識されてると気づき始めたときの期待と不安、そして高揚。

軽く指先が触れただけ、視線がぶつかっただけでも狂おしいほどに胸が踊ったあの甘い瞬間。

（そう、あたしは負けない。コザックとのこの想い出があれば、絶対にこんなクズに屈したりしないっ）

ギユネイの指が徐々に際どい部分まで伸びてきていたが、ミリスは意に介してないとばかりに恋人との絆の強さを語り続ける。

「聞いているだけでぞわぞわするような甘酸っぱさですね」

「だ、黙りなさいっ」

もう確実に好き合っているとわかってからも、なかなか関係は進展しなかった。

しかしミリスの誕生日にリボンを渡すときに、コザックは愛の告白も一緒にプレゼントしてくれた。

『身分違いだとわかってる。いつここから追い出されても文句は言えない。でも、それでもこれ以上ミリス様、いや、ミリスへの想いを閉じ込めておけないよ。狂おしいくらいに気持ち溢れすぎて、僕の胸はもうはち切れそうなのだから……！』

あのときの青年の表情も声も、すべて覚えている。忘れられるはずがない。きっと自分は死ぬまであの瞬間を忘れないという確信がある。

甘い愛の言葉とともに贈られた赤いリボンは今もミリスのポニーテールを彩ってくれている。そう、今このときも。

「なるほど。それで、初めてのキスはいつでしたか？」

「イヤよ、誰がそんな……アアッ」

短いスカートが捲られ、下着の上から小振りなヒップが撫でられた。

「言うわ、言うわよっ」

少しでも死刑執行を先延ばしにしたい王女は、恋人との初めての接吻の想い出まで口にしてしまった。

『あなたにプレゼントを贈れば誰かに怪しまれるかもしれない。だから今はこれで許してちょうだい、コザック』

コザックの誕生日に贈った、かすかに唇と唇が触れるだけのキス。思い返すだけでも全身が熱くなる、そんなファーストキスだった。

（ごめんねコザック。あたしたちだけの秘密なのに……）

だが、ギュネイの執拗な追及はいっこうに終わらなかった。

二度目のキス、初めて舌を絡めたキスだけでなく、乙女の純潔をいつ、どのように恋人に捧げたかまでを聞き出されてしまったのだ。破瓜の瞬間の痛みまで卑劣な男に説明するのは、汚辱の極みであった。

しかし、それだけはイヤよ、と突っぱねるたびに節くれ立った指や皺だらけの手が乳房や尻、太腿を這い回る以上、そうするほかはなかった。

（許さないから……こいつ、絶対に許さない……!）

しかしミリスはここにきてようやく己の女体を襲う変化に気づいた。

（な、なに、これ。どうしてあたしの身体、こんなに火照ってるの？　なんで、コザックに愛してもらってるときみたいにお腹の奥がきゅうんってしちゃってるの？）

（そろそろ薬が効いてきた頃合いですかね）

ベッドの上で四つん這いになったまま切なげに引き締まったヒップを揺するエルフの王女を見下ろしながら、ギュネイは唇を歪めて笑った。

ワインに混ぜておいたのは特製の媚薬だった。

もっとも、理性を奪うほど強力なものではなく、元々の性欲を刺激し、ちょっと背中を押す程度の強さしかない。

（あまり感覚がよくなければ追加でもっと強い薬も使うつもりでしたが、その必要はありませんか）

ミリスの年齢は、エルフとしてはもちろん、たとえ人間の尺度で見てもまだまだ少

女だ。しかし、どうやらすでに充分に女として花は開いているか、少なくとも開きつつはあるらしい。

肉欲に溺れさせるというギユネイの目的からすると好都合である一方、狙っていた獲物が別の男によってすでに開発されていたという事実は愉快ではない。

(アイシャ様といいミリス様といい、どうして私以外の男に股を開かれるのか)

だが、その歪んだ独占欲はギユネイの中の牡に力を与える。

想いを寄せる女たちの心や身体から自分以外の牡の痕跡を消し去りたい、上書きしたいという狂おしいほどの欲望が生まれるのだ。

「ミリス様はそのような淫らなお顔を彼に見せたのですね。たとえ目隠しをしていても、滲み出る艶めかしさに息を吞みます」

「み、見ないでッ」

ギユネイに顎を持ち上げられたミリスは顔を振って拒絶するが、その抗いは明らかに弱々しい。目隠しで視界を覆われている不安もあるのだろう。

両手首を括られた腕以外は自由に動かせるとはいえ、この囚われの姫がとれる姿勢はせいぜい四つん這い、亀のように丸まって身体の前面をガードするのが精一杯なのだ。

「いいえ、見ます。あなたのような美しい方を前にして、どうして見ないなどという

愚かな選択肢がありましたよ」

「だったら見るだけにしなさいよこのクズ！　む、虫酸が走るのよ、アンタみたいな人間に触られると！」

確かにミリスはギュネイに触れられるたびに身をよじって逃げようとする。

だがその静脈まで透き通って見えるような白い肌は明らかに赤らみ、その表面には汗の膜すらできている。

「それは申し訳ございません。しかし、これは取引なのです。どうかご容赦ください」

言葉だけの謝罪をしながら、ギュネイはさらにねちっこいタッチでミリスの女体をまさぐる。

また、脅える小動物のような美姫の反応を楽しみつつ、彼女の服を少しずつはだけて露わになる肌面積を拡大させていく。

「そこは、そこはやめて……触らないで……アアッ、イヤッ」

片袖から侵入した手が慎ましい胸の膨らみを包むように揉んだ瞬間、ミリスはこれまでで最も強い抵抗を示した。が、ギュネイはミリスの背中にのしかかり、さらに反対側の乳房も手のひらにすっぽりと収めてしまう。

ブラジャーを必要としないほど小さな胸乳を翳っているのだという背徳感が中年魔

術師の血を滾らせる。

「ううう……イヤ……こんな……イヤよ……イヤ……触らないでよ、バカ……ア」

まだまだ成長の余地を残している穏やかな稜線をねっとり手のひらで堪能する一方で、ギュネイは目の前のうなじに唇を押しつける。

少女特有の甘ったるい、どこかミルクを思わせる匂いを音を立てて嗅ぎながら、ツンとしこってきた乳首を指でつまむ。

「ひうウウッ！ なにを……くっ……ンッ……ンンンッ」

小さい分、感度は高いらしく、のしかかったギュネイを振るい落とさんばかりに細い肢体が跳ね上がる。舌に伝わる味が濃くなり、目を細めたギュネイはぺちゃぺちゃと音を立ててエルフ少女の汗を舐め取る。

「くっ、あっ、イヤ……気持ち悪い、のよ……もう……やめ……くひっ！」

目隠しをされた少女からは凄まじいまでの嫌悪と、それを裏切る肉体の反応が同時に伝わってくる。

心は絶望しているにもかかわらず、身体は徐々にではあるが確実に女の悦びを得始めているのだ。

（さすがアイシャ様の娘です。髭り甲斐があります）

母アイシャとはスタイルも成熟度もまるで異なるミリスだが、男の魂を蕩かすよう



な蠱惑的な汗の匂いや、鼓膜や脳を振るわせる甘い声は確かに同じ遺伝子を持っていると思わせる。

「ずいぶんと敏感ですね。コザックにもこのように愛撫されたのですか？」

「っ!？」

うなじを舐られ、乳房を揉まれ、その頂点の尖りをしごかれていたミリスがびくり、と大きく震えた。敢えて恋人との情事を思い出させることで、別の男に玩ばれている現実を心と身体に深く刻み込むのがギユネイの狙いだ。

「うるさいうるさいっ、あたしを辱めるなら黙ってやればいいでしょ!？」

ミリスは健気に抗ってみせるが、絶対的優位に立った男からすればそんな女の反応は、獣欲という炎に油を注ぐ行為に他ならない。

「夜はまだ始まったばかりですよ、ミリス様」

「あっ……なにを……なにを……アアアア!」

スカートを捲り上げ、ショーツの底に浮かんた楕円の染みに指を這わせる。

そこはギユネイの予想以上に熱と湿り気を帯びており、この少女が望まぬままに得ていた悦楽の大きさが容易にわかった。

「これはこれは……」

わざとはっきり言わなかったのは、そのほうがミリスに与える羞恥がより強くなる

と計算したためだ。そしてそれが正しかったことは、驚くほど赤くなった長耳が如実に物語る。

これはミスも、己の女の反応を自覚していた証拠だ。

「コザックとの甘い夜を思い出してしまいましたか？ 彼との愛の交歓はそれほど、下着をここまでぐっしょりと濡らすほどによかったのですか？」

熱くなった耳を舌先でなぞりながら、ねちねちと言葉で責める。

「私と彼、どちらの舌が感じますか？ どちらの指が気持ちイイですか？」

「コザックに決まってるでしょ、この外道ッ」

「なるほど、それは残念です。しかしその外道の愛撫でここまで感じるのなら、彼とのときはどれだけ淫らになるのでしょうかね、ミス様は」

「うるさいうるさいうるさいっ、もうやめてよ、もういいでしょ、さっさと目隠し外しなさいよ、縄、ほどきなさいよ！」

恥ずかしさを押し隠すために、ミスはことさら強気な態度をとってくるが、それはすなわち、この少女の限界に近い証左でもある。

（怖いんですね？ 視界と腕の自由を奪われ、乳房を嬲られ、そして女が最も隠さなければならぬ一筋のワレメまで触れられた今、ミス様は私が恐ろしくてたまらないのですね？）

アイシャを凌辱したときと似た、けれどそれよりもさらに寧猛な激情がギュネイを衝き動かす。

纏っていたローブを脱ぎ捨て全裸になると、小柄ながら鍛え上げられた肉体が露わとなる。その筋肉の束に包まれた姿はとも中年のそれではなかったが、特に股間でそそり立つペニスの逞しさは尋常ではなかった。

「な、なにをしてるのよ……ね、ねえギュネイ、まさか……まさかホントに」

男が服を脱ぐ気配を察したのだろう、目隠しをされた王女が声を、半裸に剥かれた肢体を震わせる。

その脅えた姿に反応して震えた肉棒は下腹部に張りつくほどに反り返っていた。

「ご安心を。私ごときではミリス様をコザックほど悦ばせることは叶いますまい。私は勝手に愉しみますので、そのあいだけ堪えてください。なに、すぐに済みますよ」

心にもないことを口にしつつ、ミリスの背後に回る。

「ひっ！」

ミリスは本能的に逃げようとするものの、両手を括られた状態ではままたまらない。むしろ、その哀れな姿によって卑劣な人間の加虐心を煽る結果になってしまう。

ギュネイは勝ち誇った笑みを浮かべたまま小柄なエルフの下半身からショーツを剥

ぎ取ると、その濡れた花弁をまずは目で犯した。

「見るな、見るなぁ！ 人間のくせに、下等な種族のくせにい！ ああ、見ないで、あたしのそこ、見ないでよお！」

たとえ視界を奪われていても敏感な部分に突き刺さる男の視線はわかるらしく、ミリスは泣き喚く。

だが両足首の上にどっしりと膝を乗せられた小柄なエルフにはもはやどうにもならない。剥き出しにされた無毛の花園を恋人ではない男に晒すしかないのだ。

「ミリス様はこれも可憐ですね。つるつるで、肌触りも最高です」

「うひっ!? あっ、イヤ、触る、なっ、そんなところ、触るな……あ！」

秘所を見られ、指でもいじられるのは相当な恥辱なのだろう、ミリスは尻を振って悪逆な魔術師から逃れようとする。それはどこか滑稽でもあり、牡を誘うような卑猥さもあった。

ギュネイの仕込んだ薬とねちっこい愛撫に加え、生来の性感の高さもあるらしく、エルフ王女の無毛のスリットは粘ついた汁で妖しく光っている。

「その下等な人間風情にいじられてこんなにマン汁で濡らすとは、ミリス様はずいぶんと淫乱なのですね」

「マ……!?!」

王族の少女には無縁であるべきの卑猥すぎる単語に、ミリスの尻振り運動が一瞬制止する。その隙を逃さずにギュネイは節くれ立った指を膣穴にめり込ませる。

「あっ……あううんん！」

「ほお。私の指はコザックよりも太いはずですが、ずいぶんとすんなり入りましたね」

「バカにしないでっ、コザックのはこれよりも一回りは太いわよ！」

「おや、私は指の話をしていたのですが。そうですか、彼のイチモツは私のこの指より一回りしか大きくないのですか」

混乱していたとはいえ、自分がとんでもない墓穴を掘ってしまったことに気づき、ミリスが青ざめる。が、ギュネイの指が蜜壺内で動き始めるとすぐにその顔は再びピンクに染まる。

「んうううっ、う、動かないで……んんんっ」

「いかがですか、愛しい彼のチ×ポと比べて私の指は」

底意地の悪さを隠さないギュネイの揶揄に、気の強い姫は頭を振って抗いのポーズを見せる。けれども、尻を高々と掲げ、無毛のクレヴァスを晒す間拔けな格好ではギュネイを喜ばせるだけだ。

（なるほど、入口こそいくらか男に慣れてますけど、奥は狭いですね。コザックの肉

棒が私の指とそう変わらない太さというのは事実のようです」

エルフ族のペニスはその高身長とスリムなスタイルに相似で、人間に比べて長いが、太さは劣る。だからそういった勃起を相手にしているエルフ族の女にとって、ギュネイの極太男根は相当なショックらしい。

（私のこのチ×ポには、あなたのお母上も驚いてましたよ。まあ、一度でも経験し、慣れていただけたら、クセになってもらえる自信はありますがね）

アイシャと助手のナイン、エルフの経産婦二人を虜にしているギュネイの凶暴な肉筒が、びくびくと期待に震える。

「いい締めつけです。潤み具合も、肉襞の蠢きも一級品です」

「んっくうっ！ ああ、だ、だから動かすなって言ってるのよ、この、クズ……ッ」

「一国の王女が、しかもあなたのような可憐な方がそのような汚い言葉遣いではないけませんよ。せっかくの美貌が台無しだ」

指を根元までねじ込み、みっちり絡みついてくる女肉を堪能しながらギュネイは少女の耳に軽く前歯を立てる。

「アアッ、イヤ、耳、ダメ……んふうっ！」

「おや、甘噛みはお気に召しませんか？ コザックはこんなふうに耳を愛してはくれ

なかったのですか？」

「し、しないっ、コザックはそんな変態みたいなこと、しなひいいイッ！」

ミリスのセリフが悲鳴に変わったのは、ギユネイの指が軽く折り曲げられ、クリトリスの裏に位置する鋭敏なスポットを押圧したためだ。

「ああ、ココは気持ちよくなっていたただけるようですね」

がくがくと跳ねる欲しい腰を抱き抱え、ギユネイは執拗に女体の弱すぎる一帯を指先で刺激し続ける。

と同時に、肉壁を挟んだ向こう側にある女の最も鋭敏な突起を親指の腹で軽くこね、ミリスに望まぬ快楽を送り込む。

「ヒイッ！ やめて、あっ、なに、そ、それヤダ、あっ、やめなさいっ、ああっ、お願いよ、ホントにそれ怖い、あっ、あっ、やあっ、お願い……指、やあっ、やだッ!!」

ミリスの若い半裸身がベッドの上でのたうち回るが、ギユネイの容赦ない責めは止まらない。

「やっ、やああっ、やあああっ！ ああああっ、これ、これダメ……ダメえええっ!!」

ギユネイの太い指をぎりぎりと締めつけながら、ついにミリスが牝の悦びを極めた。

「んっ……ンン……んく……っふう……んふううう……！」

唇をきゅっと閉じたままだったのは、プライドの高い王女の、せめてもの抵抗だったかもしれない。

（イッた……イッちゃった、の？ あたし……あたし、こんなヤツの……人間なんか……？）

頭の中心部で稲妻が閃くような鮮烈なアクメが過ぎ去ると、その愉悦の大きさに比例した絶望がミリスを包んだ。

（ああ、でもなんだったの今の……あんなの、コザックとは一度も……）

恋人への申し訳なさに目隠しを涙で濡らす一方で、若い肉体は初めて経験した鋭く、深い快感の余韻を無意識のうちにかき集め始める。

まだ膣内に挿入されたままの指を愛おしげに締め上げつつ、腰がゆらゆらと悩ましく宙に円を描く。

先程のオルガスムスによって新たに分泌された愛液がギュネイの指から手首、膝の辺りにまで伝い落ちているのを目隠しのせいで見ずに済んだのは、ミリスにとっては幸いだったかもしれない。



「素晴らしいイキっぷりでしたよ、ミリス様。私の指がオマ×コに押し碎かれるか  
一瞬ひやりとしたほどです」

「だ……黙りなさい、この痴れ者ッ」

にやにやと笑う卑劣な男を叱責するが、その声に力がない。声だけでなく、身体全  
体に力が入らない。特に腰から下の感覚が曖昧だ。

（なんで……どうしてこんなに熱いのよ……コザックとはこんなふうになったことな  
いの……）

そのくせ秘部の感覚だけはやたらと鋭敏で、ギユネイの指の形が膣粘膜を通じては  
っきりイメージできるほどだ。

（指でこれなら……アレは……オチン×ンはもっと太い、のよね……）

ミリスとて恋人との逢瀬を重ね、自分ではそれなりに経験を重ねてきたと思ってい  
る。すでにセックスで絶頂を極めた経験もあるし、恋人のために男を悦ばせるテクニ  
ックも多少は覚えた。

だが、そんなミリスでも、人間族の、ギユネイのイチモツは完全に想像の外にある。  
「んひッ！」

膣穴から指が引き抜かれる。いよいよその瞬間が来るのだと悟り、ミリスは本当の  
意味で恐怖した。脅えた。己の運命を嘆いた。

「おっお願いよギュネイ、それだけは許して！ あたし、ホントにコザックが好きな、彼と結ばれたと思うてるの！ なんでもする、あたしにできることならなんでもするから、どうかそれは、それだけやめて！」

必死になって懷柔を始めるが、禿頭の魔術師は無言のまま少女の狭穴にその肉凶器をあてがう。見えないことが余計に恐怖を倍增させる。

「ヒッ！ 謝るから、酷いこと言ったの、ちゃんと謝るわ！ 失礼なことを言ってごめんなさいギュネイ！」

見えないが、恋人の倍はありそうだとわかる太い亀頭が王女の粘膜に接触する。おぞましさと一緒に妖しい快感が走るのが切なくて悲しい。

「わかったわ、お、お口でしてあげる！ あたし、コザックに色々教えてもらったから上手よ、きっとアンタも気持ちイイって思うから！ ねえ、だから、だからそこは許してちょうだい、あたし、好きな人がいるのよ……大事な人が……アアアッ!!」  
涙ながらの哀願を完全に無視して、他種族の、恋人でもなんでもない中年男の生殖器がエルフの花弁を押し割ってきた。

「ッ……ッ……ッ……!!」

最初は痛みが、次に絶望が、最後に驚愕がミリスを襲った。  
痛みはすぐに消えて圧迫感へと変わった。

絶望は絶望のまま続いた。

そして巨大な肉塊が己の胎内に収まったという驚愕はすぐに、最も望まぬ感覚へと変貌した。

「んぐううっ……ふっ、ふううっ……ふーっ、ふううーっ！」

「そうです、そうやって大きく息を吐くとすぐに慣れますよ。もっとも、マ×コの壁たちはぶち込んだ瞬間にはもう私のチ×ポに馴染んでいたようですがね」

（う、うるさい、黙りなさい！ 人間ごときが偉そうにっ）

本当ならば振り返ってこの無礼なケダモノを睨みつけ、怒鳴りつけてやりたかった。だが、蜜壺を穿ったペニスのあまりの太さと硬さ、熱さに、ミリスはまともに言葉を発することすらできないでいた。そもそも、目隠しをされているから睨むことも不可能だ。

恋人のそれとは二回り以上も太い勃起によって生じた鋭い痛みはすぐに引いた。若い媚肉が柔軟に屹立を受け入れたためだろう。

もっとも、ミリスにとってそれは「幸いにも」とは言い難い事態だ。痛みと入れ替わりに彼女を襲ったのはまぎれもない快感だったからだ。

（ああ、なんでよ、どうしてよお……やめて、こんなの気持ちよくない、コザックとしてるときとは違うの、あたし、犯されてるのにい）

恋人との甘い経験の数々によって己がすでに女として磨かれていたのだと気づかされた。今の少女にとってはあまりに残酷な事実だった。

「おお……素晴らしい穴です……さすがアイシャ様の娘……オオッ、なんて、なんて締めつけ……！」

背後から聞こえてくるギュネイの声が歓喜に震えていた。この卑劣な男がここまで感極まった反応を示すことに驚く。

「ぬ、抜いて……早く抜きなさいよッ……ああっ、さ、裂ける……ひああ!？」

ギュネイの手がミリスの引き締まった尻肉を驚掴みにした直後、忌むべき動作が開始された。この邪悪なる魔術師がいよいよピストンを開始したのだと悟り、ミリスの青い瞳から涙がこぼれた。

「うっ、うっ、うううっ」

絶望の涙を目隠しが吸う。

「大丈夫です、少しずつ慣らしていきます。大切な方のオマ×コをめちやくちやにするわけにはいきませんからね」

「んいっ！」

覆い被さってきたギュネイが囁きながら耳の先端をしゃぶってきた。

（こ、このお……ああっ、ああっ、耳はやめて、アア、気持ち悪い……ッ）

エルフにとって大切な耳を飴のように舐められるのはとてもなくおどましかった。そして、そのおどましさの中に否定のしようがない快感があるのを認めざるを得ないのがもっとつらかった。

（やあぁっ、あた、あたし、耳、感じやすい、のに……コザックにだって、あんまり触らせなかった、のに）

感じすぎるがゆえに恋人にもそうそう許さなかった場所を嫌いな男の舌粘膜で凌辱される悲しみに、目隠しの染みが広がっていく。

だが、ミリスにとって目下の最大の問題は、徐々に強く、速くなってきた抽送だった。

秘口を貫いた肉幹の太さも確かに脅威だったが、その硬さと形状もミリスを苦しめた。

（こ、これ、ホントにギュネイの、なの？ 鉄かなにかじゃないの？ か、硬すぎるし、あぁっ、知らないところばかり、当たって……あぁ、イヤ……イヤッ）

長さだけならコザックのほうがわずかに優る。だが硬度で劣るため、たとえ深く挿入しても膣圧に屈してそう深いところまでは届かない。

一方のこの人間のペニス少女の狭くて強烈な締めつけに負けない硬さがあるため、易々と奥まで到達する。届いてしまう。

「くっ、うっ、うっ、うううっ！」

しかも胴部分に比べて大きく張り出したエラが膺壁をくまなく擦り、肉竿が往復するたびに媚粘膜全体を刺激してくる。

たった一回のストロークで送り込まれる快感の絶対量が恋人のそれとはあまりにも、比較にならないほど多い。快感の密度も濃い。

（ダメ、こんなのダメ、違う、絶対に違うっ！ あたし感じてない、人間に犯されて感じてるわけがないのッ）

あるいは、男を知らないまま、清い身のまま凌辱されたほうが王女としての体裁は保てたかもしれない。

純潔を散らされる恥辱の代わりに、この憎き男の前で女の、牝の反応を晒さなくて済むからだ。

「だいぶ私のチ×ポに馴染んできましたね。素晴らしい肉穴ですよ、ミリス様」

粘膜同士が接触している以上、いくら声を押し殺しても愉悦に蕩け始めてる事実は隠せない。それが勝ち気な少女にはたまらなくつらかった。

「黙りなさい、人間ッ！ け、汚らしい……ウッ、ウッ、んくうううンン！」

いくら言葉で虚勢を張っても、肉体がミリスを裏切っていく。

それがわかつているギュネイは余裕たっぷりの腰使いで、わざとゆっくりと、時間

をかけるようにミリスの蕩け始めた蜜洞を蹂躪してくる。

テンポを、角度を、強さを変え、ただの一瞬もミリスに気を抜く暇を、快樂から逃れられる隙を与えようとしない。

「ひうん、ひっ、はっ、あっ、ああ、やん、あっ、もっ、もうイヤ、イヤあ！」

封じられた両手と奪われた視界とがもどかしさと不安を叫び、感覚を鋭敏にさせる。「いい声が出てきましたね。彼にもいつもそのような甘い喘ぎ声を聞かせてあげたのですか？」

「言わないでっ……コザックのことはやめて……アアッ、ふ、深いのよ、アンタの、深すぎるのよおッ」

ただ肉欲だけに襲われたのなら、まだよかっただろう。

けれどこの悪魔は敢えて愛しい青年の名を口にして、ミリスの嘆きを深めさせてくる。

恋人がいるのに、このようにケダモノのような格好で犯されて感じ始めつつある事実を容赦なく突きつけてくるのだ。

「おや、私のはそう長くはないはずですが？ それとも、コザックのチ×ポは短小だったのですか？」

「う、うるさいうるさいうるさいっ！ も、もう黙っててよ、黙ってあたしを犯して

ればいいでしょお！」

身体だけでなく心までも穢そうとする男の狙いに気丈な姫はもう泣くしか、啼くしかなかった。

（こいつの、どこまで入ってくんのよ！ ああ、こんな知らない、コザックはここまで来てくれなかったのに……なんでよ、どうしてよお！）

ギョネイにバックから貫かれて、ミリスは初めて知った。男と女はここまで深く繋がれるのだと。結合できてしまうのだと。

（知りたくなかったよお……あたし、あたし、コザック以外の男なんて知りたくなかったのに……うああ、また、また知らないところに当たる、ごりごりってしてる！）

膨張しすぎて湾曲した勃起がピストンのたびに膣内のあちこちを擦り、削り、抉り、ミリスを追い立ててくる。

「ああ、素晴らしい、素晴らしいです……まるで若かりし頃のアイシャ様を犯してるようです……！」

自分が母の代替として貫かれているという事実も、ミリスのプライドを粉々に砕いた。

（あたし、母様の代わりなの？ 代わりで犯されてるの？ 好きな人がいるのに、こ



んな卑怯な手で、人間なんかにお腹の奥まで挿れられてるの……!?)

悲しくてつらくて悔しくて、涙が止まらなかった。

しかし、それ以上に己の花弁から溢れ出る愛液の分泌が止まらないのがもっと切なかった。

「うっ、うっ、も、もう、やめてよお……あっ、あうっ、イヤ、なの、もっ、イヤ、なのお……んあっ、あはっ、はうウッ！」

ミリスはもう悟っていた。悟ってしまった。すでに己の肉体が陥落し、間もなく最後のそのときが到来すること。

コザックとでは何十と肌を重ね愛を交わしても到達できなかった本当の女の頂が近づいている。

これまでのセックスでは一度も意識することのなかった子宮の脈動と疼きがわかる。「いい声です、姫様。牡に媚びる甘い声です」

「誰、がっ……媚びて……ンッ、また、また奥う……ン……んひっ、はひい！」

涎がこぼれるのもかまわずにシートを噛み締め、懸命に迫り来るオルガスムスの大波を押し返そうとするが、嘲笑うかのようにギュネイのピストンがギアを上げる。

その筋肉の鎧に包まれた身体をぶつけるような荒々しくも力強い抽送の連続に、少女の抗いなどなんの役にも立たなかった。

凶器と化した亀頭が王女の狭道を押し分け、これまで一度も、誰にも謁見を許さなかった子宮口に無理矢理到達する。それはまさに暴漢の如き行為だった。

「ひっ、ひぎっ、ひっ、んぎっ！」

一国の王女が発してはならない声が唾液とともに溢れてくる。

(当たってる、こいつのオチン×ンと、あたしの奥が、何度も、何度もキス、しちゃってるよお！)

ここまでどうにか唇は守り通せたが、もっと深い場所にディープキスをされてしまった事実が加速する。

なにより、子宮を震わされるたびに生じる未知の愉悦がどうしようもなく切なかった。

「ひやっ、ひやらろっ、イヒはくないっ、イヒたふないろお！」

シートを噛んだまま頭を激しく振ってアクメの接近を拒む。

「さあ、イキますよ。あなたの一番大切な小部屋に、汚らしい人間の子種をたっぷり注いでさしあげます」

「ッ!？」

ギュネイが全体重をかけてきた。

信じられないほどの高速ピストンで蜜壺を抉られ、子宮口を小突かれる。



耳を甘噛みされながら勃起乳首を指でねじられる。

「イヤ、イヤイヤイヤァ！ やめて、出さないで、そこはアンタに許してないから、絶対に許してないからぁ！ 助けてコザック、助けて！」

噛んでいたシーツを放し、哀れなエルフの少女は絶叫した。

だが、その悲痛な叫びを聞いた瞬間、ギュネイは至福の表情を浮かべながら大量の白濁汁を吐き出した。

「ヒッ……ヒイイッ！ ああっ、嘘、なんで、あっ、イヤ……ああああっ!!」

恋人にもまだ許していない、初めて経験する膣内射精の衝撃が引き金となり、ギュネイを追うようにしてミリスも絶頂を迎えてしまった。

「イッ……イク……やらぁ……こんらの、イヤ……うああ、あっ、イッ、イック……イク……ッ……!!」

恋人に与えてもらった過去のどのオルガスムスよりも深い女の悦びに、ミリスは思わず自ら絶頂を口走っていた。

「ひっ、ひいっ……イッてりゅ……あたひ、イッちゃってるのお……!!」

いつまでも続くおぞましくも甘美な牡の種付けに、ミリスは絶望と歓喜、その両方の渦に呑み込まれていった。